



フォーラムたより

2018
10月号
No. 52



首都圏布教130年記念東京集会開催



7 月21日(土)14時より、「金光首都圏布教130年記念東京集会」が、「なかのZERO大ホール」において開催された。

この集会は、東京都教会連合会主催・首都圏フォーラム共催のもと、「よるこび集めつなげようー子・孫へ、世の人々へー」をテーマに掲げ、約800名が参集した。

当日は、朝からの猛暑のために開場時刻を30分繰り上げ、13時から、紫色の揃いのTシャツを身につけたスタッフ一同が来場者を迎え、会場ロビーでプログラムや記念品(SFちゃんキーホルダー)などを配布するうちに、客席は徐々に埋まっていった。

定 刻の14時。ドローンで空中撮影されたご霊地の様子がスクリーンに投影されるなか、芝居在籍で海外でも活躍中の歌手・綿引さやかさんによる「ひかり」の熱唱で集会の第1部が幕を開けた。

その後、和泉正一実行委員長と4人の青少年が舞台上で登壇し、あらかじめ天地書附のもとにお供えしてあった各教会から寄せられた「よるこびノート」を前にして、来場者全員で「首都圏布教130年『首都圏布教祈願詞』」を奉唱し、「天地書附」を奉体した。

第 1部のメインは朗読劇。菊村禮さん(白金教会在籍)が脚本を手がけた「道は人が開

けおかげは神が授ける」を、「青二プロダクション」所属の当代一流の俳優10名が熱演し、首都圏布教の発端となった初代白神新一郎師のご教蹟をしのばせていただいた。この朗読劇では、声優がそれぞれに衣装をまとい歩き回るなどの動きがあり、スクリーンには背景画や色彩が映し出され、音楽や効果音も緻密に挿入されるなどして、来場者一同、プロの迫力ある演技に酔いしれ、白神師のお道開きの熱情に感動した。

その後、15分間の休憩中、ロビーでは「平成30年7月豪雨災害」に対する募金が行われ、多くの協力が得られた。寄せられた義援金は、後日、93,100円を日本赤十字社に、121,197円を金光教本部に寄贈した。

第 2部では、小星重治さん(町田教会在籍)と木澤文夫さん(芝教会在籍)が、それぞれの信仰体験を発表した。この体験発表は、このたびの集会の準備を始めた3年前の「首都圏布教130年プロジェクト会議」の時から、特に信徒のプロジェクトメンバーから要望のあったプログラムであり、お二方の発表によって、今後の首都圏布教への取り組みの上に大きな示唆を得ることができた。

続 いての第3部は、この日のために結成された「SF130記念合唱団」約90名の登場が始まり、「東方伝道讃歌」「神人の栄光」「いま日はのぼる」「Believe」が披露された。

合唱団が降壇すると同時に、観客席には「やつなみ法被」を着た子どもたちが次々と、手作りの「子ども神輿」が登場し、子どもたちによって来場者にオリジナル「や

つなみ手ぬぐい」が配られた。続いて舞台上に現れたのは、「大江戸助六太鼓」の6人のメンバー。会場全体に響き渡る和太鼓演奏に拍手が止まず、集会はクライマックスを迎えた。

麻 布教会の源清治氏とタレントの村田純氏の軽快な司会によって進められた集会も終盤を迎え、司会者も「やつなみ法被」を羽織り、スクリーンに投影された「東京音頭」の振り付けを紹介しながらフィナーレへと進んだ。

「東京音頭」は、6月にご本部で執行された「首都圏布教130年御礼祈願祭」の祝宴でも練習が行われ、このたびの東京集会では、予想以上に大勢の方が「やつなみ法被」を着て舞台上上がり、大江戸助六太鼓の音が響くなか、壇上で踊る人も観客席で踊る人も、会場全体が一体となって「よるこび」をあらわした。

3 時間にはわたる集会も、実行委員長の御礼の挨拶のあと、本郷教会長・西村夏夫師の発声による「三本締め」でお開きとなり、参加者一同、ここからのお道開きへの思いを新たに会場を後にした。

18時30分からは、会場を中野サンプラザに移し、「祝宴」が約140名の参加によって催された。

冒頭にフラメンコ舞踊が披露され、全員がテーブル席で会食するなか、来賓の大阪教会長・白神信幸師の祝辞や、菊村禮さんの脚本執筆にまつわる裏話、更には、「青二プロ」、「大江戸助六太鼓」のメンバーによるスピーチがあり、和やかに集会の余韻にひたった。

場全体が一体となって「よるこび」をあらわした。時間にはわたる集会も、実行委員長の御礼の挨拶のあと、本郷教会長・西村夏夫師の発声による「三本締め」でお開きとなり、参加者一同、ここからのお道開きへの思いを新たに会場を後にした。

さらにこれからは、東京センターの教区活動や首都圏フォーラムの活動への協力も、なおいっそうすすめてゆく必要がある。「布教と連帯」を旗印にして、ある首都圏布教活動に、東京センター、首都圏フォーラム、教会連合会の三者が協力して取り組んでゆくためには、これまで以上に、教会・信奉者の連帯について模索する必要があるでしょう。

また当教会連合会は、現在4つの分会に分かれて日頃の活動をしていいますが、教会の組み合わせを変える分会改組のことを、年末の定例総会(12/7)で審議する予定です。教会連合会活動の基本である分会活動が、よりいっそう活

首都圏布教130年信奉者集会を開催



者とは、親のある子とない子ほどの違いがあります」という三代金光様の教えを紹介し、信心して親を頂く喜びとともに、親なる神様に喜んで頂く信心をしていくことが大事だと、話された。

神奈川・山梨教会連合会では、「喜びにめざめ そして未来へ」というテーマのもと、6月16日(土)17日(日)、マホロバ・マイズ三浦で信奉者集会を開催し、42名が参加した。

まず、松本信吉先生(あいよかけよの生活運動関東教区推進委員)の講演「神の喜び」を拝聴。松本先生は、「信心する者とせぬ

これからの教会布教を求めて

教師研修会開催

群馬・埼玉教会連合会では7月10日から12日の二泊三日、長野県の金光教黒姫研修道場を会場に教師研修会を開催した。本年は「これからの教会布教を生み出す」をテーマに、横浜西教会長・山田信二師の講話と、それを受けての討議を中心に研修が進められた。

講師の山田師は、初代教会長であり母君でもある尚子師とともに33年前に郊外の新興住宅地に教会を設立された。尚子師の「私をお母さんだと思って何でも話さない！」という渾身のお取次、信徒組織運営と様々な伝道アイデアでそれを支える信二師、妻の浩子師の努力により、実績を積み重ねて

初日の班別懇談では「喜びにめざめる」をテーマに、これまでに頂いてきたおかげや、信心の喜びについて語りあった。翌日は班編成を変えて、教師班は「人を育てよう」、信徒は「お道の仲間をつくろう」「信心を高めよう」「信心の喜びを伝えよう」というテーマについて、自分は何ができるかアイデアを出し合い、班ごとに発表(写真)。未来に向けての信心実践に示唆的な内容となった。

当連合会では一泊での集会久しぶりのことで、ゆつくりと交流を深めながら、信心を求め合うことができた。

こられた様子が、具体的な数字も交えて紹介された。布教当初の隣との信頼関係構築、教会誌ポスティング、学習塾、生け花教室など、地元に着するまでの数々の工夫に始まり、お取次が土台、お礼が先、人のお役に立つ、取次者の笑顔と明快さ、「教え」が要、電話日参、子どもにも御用を、教会の信心テーマ策定など、現在も継続しておられる取り組みの内容が詳しく解説された。この中でも特に「新しい人、信心の浅い人にとって居心地の良い教会、親しみやすい教会にする」「子どもへの布教」「負担にならず不足のない御用にすること」「時代や社会の動きに対応すること」などの具体的な取り組みはたいへん参考になる内容であった。

「よろこびノート」活用について研修



千葉県教会連合会では6月3日(日)、千葉教会を会場に第48回研修会を行った。

今年も首都圏布教130年のお年柄にあたり、東京都教会連合会で「よろこびノート」の取り組みが始まり、千葉県内の教会でもこの取り組みにかなりの方が参加していることから、「よろこびノート」について研修した。

講師は、本所教会長・宮田和弘

映像鑑賞と班別懇談



運動推進を願って

茨城・栃木教会連合会では、7月7日(土)、小山市生涯学習センターにおいて、教師信徒合同研修会を開催し、30名が参加した。本年は、首都圏布教130年というお年柄をお迎えしたことから、開催に先立ち、「あつまの道

先生。「よろこびノート」の説明や、先生の体験に基づく講話をいただき、よろこび、喜ぶ、喜びを見つける稽古など丁寧に話してくれました。例の1として、先生の実家のお母さんは喜び上手で何事にも前向きで「ありがとう」をすぐ言われる、病気により体に不自由ができたが、それでも前向きに生きておられる方。例の2として信者さんの信心により難儀がおかげになった話。例の3としてある本を紹介され、ガンになったが、「ありがとう」を言い続けることよって元気を取り戻した話である。この話は「おかげは和賀心あり」につながるとして、喜ぶ心、和賀心をしつかり持つていれば大きなおかげが生まれる。そして最後に、喜びにしつかり心を向ける取り組みを共にしていきましょうと、結ばれた。改めて喜ぶことの尊さを学ぶ良い研修会になった。

のいしすゑ」の映像を鑑賞した。さらには「神人あいよかけよの生活運動」の推進を願い、ドキュメント番組のDVDを図書館から借り、午前中は映像を鑑賞し、午後からは鑑賞した映像をもとに班別懇談を行った。

班別懇談は、活発な意見交換が行われ、全ての班が予定時間では足りない様子であった。今回の研修会を通して、今まで以上に「人を祈り 助け 導く」という一人一人にならせて頂きたいという願いを強く持つことができた。また、今後の連合会のあり方についても、情熱をもって道を伝えていくような活動となるようにしたいとの思いを皆で共有し合い、充実感と笑顔の中で散会した。

寄稿

岡山県真備町と広島県呉市で

泥かきボランティア
大崎教会 田中真人

首都圏災害ボランティア支援機構にボランティア申請し、8月9日、14日までの6日間、西日本で発生した平成30年7月豪雨で被災した地域でボランティア活動をした。フェイスブックでボランティアの呼びかけをしたところ、活動日はそれぞれ、4名の方が一緒に参加して下さるようになった。最初の二泊は、一般ボランティアにも開放された修徳殿に宿泊した。9日は、倉敷市災害ボランティアセンターで受付。広島教会の岩本信治先生と、ボランティアの呼びかけに答えてくれた友人と3人で参加。真備町の川辺地区のお宅の周りに土砂を土嚢に入れる。お宅の女性は、二階からヘリコプターで救出されたことなど、当時のことを話してくれた。

10日、新倉敷駅からのボランティアバスに乗り倉敷市災害ボランティアセンターへ。紹介された箭田地区のお宅では、敷地に積もった土砂をスコップで掘り土嚢袋にいれた。土は乾燥して固く、力も入る。ボラセンは機能的に運営されている。活動後、通路に沿って歩くと、長靴洗浄、手洗い、消毒、うがい、水分補給、冷たいタオルで顔を拭き、うちわ等の配布、そして募金コーナーと、学生達もセクションを担当。これまでの災害から学んだこと、経験がここに集約されている、そう感じた。

11日、14日までの4日間は、年少女会連合本部が立ち上げた、KYA災害復興支援団の活動に参加。広島県呉市安浦の被災したお宅まで、毎日金光から車で通った。濡れて廃棄するものや、家のまわりに流れてきた土砂、岩やいろいろな物をスコップ、ツルハシ、ジョウレンなどを使い掘りおこし、軽ダンプに積んで廃棄所に運んだ。ユンボを使えるスタッフは、岩など人の力ではどうにもならないものを力強く移動。参加している人達は、毎日10人前後。(20代から70代)。年配の方も少女会の御用を通して、道具や身体の使い方が実に上手く力強い。日頃の御用が、被災した地域で、このように人の助かる御用に繋がっていることに感動。東京教会の伊藤智子さんは、ボランティア初の息子さんと二日間参加。てみ(大きなちり取りのような農具)に入れられた泥をスライドしては空のてみに入れ替える。わんこそばの姉さんみたい。心を配れば出来ることがたくさんある。作業効率があがり大変助かった。

活動最終日に、お宅に手を合わせ、亡くなられたご主人の御霊様のお道立てを、残された家族の事、今後の復興の事を祈らせて頂いた。被災した地域に立つと、私たちの今ある生活が当たり前ではないことを強く感じる。神様に、その当たり前を感謝し、困っている人の為に、少しでも命を使うことが出来たらありがたい。被災した地域の状況は刻々と変化している。我こそはと思われる方は、首都圏災害ボランティア支援機構に問い合わせをお願いしたい。